

# The Reminiscence of Exellia NG+1

## 二色の残響

### 作成レギュレーション

#### 基本概要

- ・ 経験点：63500 点（新規）、70000 点（継続）
- ・ 資金：56500G（新規）、65500G（継続）
- ・ 名誉点：1400 点（新規）、1700 点（継続）
- ・ 成長回数：121 回
- ・ アイテム：楔石の欠片×12、楔石の大欠片×6

#### 各種制限について

- ・ ヴァグランツ禁止
- ・ 蛮族 PC 禁止
- ・ SW2.0 / 2.5 標準流派への入門、及び秘伝の習得・使用の禁止
- ・ 武器防具強化に関する特殊制限（宿り木の棒杖、楔石強化以外は全面禁止）
- ・ レベル制限 7～8
- ・ 成長回数が 10 以上の時、その成長回数の 60%以上の偏重割り振り（極振り）禁止

### 動画用の参考資料

#### メモ群

##### メモ：480 ミリ 3 連装磁気・魔動機術連動式主砲

魔動機術式の特殊な加工を施した弾丸と、その弾丸を撃ち出すための超電磁気レールを備えた主砲。言ってしまうと、「レールガンとマジテックの弾丸のハイブリッド」。

#### 導入

##### 滅びに抗い続ける追想

エクセリアは、過去の世界に思いを馳せる。

余りにも強すぎて、他の者から忌避された世界線があった。

己が関与した結果、頓挫した世界線があった。

子を持つも、誤った選択から滅びを迎えた世界線があった。

滅びへの復讐を果たそうにも、果たせずにいた世界線があった。

世界の悪意によって、向かうべき結末に至ることができなかった世界線があった。

(※GMメモ：

余りにも強すぎて忌避された世界線…『無印』

己が関与した結果、頓挫した世界線…『RE』

子を持つも、誤った選択から滅びた世界線…『REA』

滅びへの復讐を果たそうにも果たせずにいた世界線…『RV』

世界の悪意によって、結末に至れなかった世界線…『1 周目 TREx』)

幾度も繰り返し、滅びを阻止するように立ち回るも、その都度、世界からの憎悪が、己の仲間を押し潰し、繰り返しを強要した。

そして、己がその限界を迎える、最期の世界線。

世界を手繰る律、この物語の執筆者である『ホクトクラフト』の出現を見て、エクセリアは確信を持った。

物語として破綻しているこの旅路は、そもそも死んで繰り返すことを前提としている物語であり、絶望のリセットを、無限に繰り返し、破滅を見届けることを悦とする、律の存在故のものだったのだ、と。

ともすれば、律は『ハッピーエンド』に対して中指を立てるつもりなのだろう。それぐらいに、『ホクトクラフト』は世界に憎悪を持っていたのだ。

しかし、滅亡一辺倒では、つまらない。そう判断したホクトクラフトは、きっと己という端末を生み出したのだろう、と考察した。

エクセリア

(…私は、いったいどこへ向かえばいいんだ)

そう思いながら、大広間へと出る。

大広間では、エメリーヌが冒険者を集めて何やら話しているようだった。

### 無限輪廻の祝福無き者

時は少し遡り。君達は、エメリーヌによってサロンに集められていた。

エメリーヌ

「こんな状況で…いや…こんな状況だからこそ、かもしれないわね…。

『祝福無き者』が、またしても現れたそうよ。

問題は、その能力…。ヴァルマーレの大和型を遥かに上回る巨体と、480 ミリ 3 連装磁気・魔動機術連動式主砲の斉射を耐えるほどの耐久能力…そして、木々を自然発火させるほどの熱を、持っているとのこと」

(※GMメモ：RP待機)

**冒険者+知力またはセージ知識判定 目標値：17**

**成功時、「メモ：480 ミリ 3 連装磁気・魔動機術連動式主砲」を解禁する。**

エメリーヌ

「既に、ヴァルマーレの兵士に犠牲者が出ているそうよ。…この辺りの話を、エクセリアがしてくれればいいのだけれど…」

エメリーヌが周囲を見渡すも、エクセリアはいなかった。

エメリーヌ

「大広間に向かいましょうか。そのうち出てくるでしょうし」

…そうして、今に至る。

エクセリア

「…巨体を誇る祝福無き者か…。十中八九、アイツだろうな。

だが、敢えて君達に答えを渡さない。君達自身の意志で辿り着くといい」

エクセリアがそう言って、君達にその正体を明かすことを渋る。

それを訝しんだエメリーヌが、声を荒げ胸倉を掴む。

エメリーヌ

「あんたねえ、『ホクトクラフト』だか、なんだかよく分からない存在が現れてから…、いつもそんな状態じゃないか！それがホクトクラフトの意志か！？」

あんたはどうしたいか言ってみなさい！教えたいのか、教えたくないのか！それともただ単純に知らないだけなのか！」

エクセリア

「…教えてもいいが、アイツに勝てる確証はない…。君達の命を無闇に費やしたくはないが…それでも教えろと言うのなら応えよう」

エメリーヌ

「早く！」

(※GMメモ：RP待機)

エクセリア

「…お前達も、強情になったな。まあ…そこまで言うなら仕方ない。

君達がどう受け取って、どう感じるか。その想いに関してはノーコメントとさせてもらうでしょう」

そう言って、彼女は懷から熱を発する石のようなものを、耐熱皿の上に置く。

エクセリア

「これを見ろ。この物体は…一見すると溶岩の冷える前のように見えるかもしれないが…ヒトの皮だ」

(※GMメモ：RP待機)

エクセリア

「君達は、祝福無き者がどのように生まれてくるのか、知っているか？」

(※GMメモ：RP待機)

エクセリア

「元々は、ある世界の民をさしてそう言った。だが、彼らが『剣の加護』を得ようと他者を殺し、その身に眠るカルディアのマナに触れた途端…思いも寄らないことが起きた。

殺した相手が蘇生するどころか、人格が豹変し、カルディアのマナに寄らず魔力を手繰り魔法を振るう、暴力装置が生まれた」

(※GMメモ：RP待機)

暴力装置。その言葉に、君達は若干困惑するだろう。

エクセリア

「無論、同じ世界の間人であっても、彼らに対して悪感情を抱く者もある。  
たとえば、私のようにね」

(※GMメモ：RP待機)

エクセリア

「この皮膚片は、そんな祝福無き者を代表する 14 に連なる存在の第 2 席の間人…。  
『世界の輪廻を司る』力を持つ祝福無き者、アンドリアスの一部だ。  
これは、彼が残した生ける炎のようなものだ」

エメリーヌ

「魔法的にも、それが成立するというのね」

そう言っ、エメリーヌはその肉片を観察する。

エメリーヌ

「…なに、この魔力は…。人が変質した、巨人…？」

エクセリア

「そこから先は、己の目で確かめろ。私から聞くより、その目で見たほうが早い」

## 輪廻を司るもの

君達は、エクセリアに指定された地点…ラカロテア樹林の小高い丘の上にいた。  
そこへ、襲い来る影がひとつ…。あまりにもデカい、異形の巨人がいた。

(※GMメモ：RP待機)

エクセリア

「聞いた話によると、奴のあの姿の名は、『終尾の巨人』というらしい。すべての世界に  
対する終焉を飾るものだからだと」

リーン

「じゃあ、アレは…」

(※GMメモ：RP待機)

エクセリア

「聞いた話でしかない。奴に明確な意志があるのかも分からない。だけどこれは…これだけについては、言わせてもらうよ。『アレが出ただけで世界が滅ぶわけではない』」

そのとき、流暢な交易共通語で、その異形がはなしかけてくる。

アンドリアス

「この付近に、いるっていう話だったが…どこにいる、エクセリア？」

エクセリアが君達に軽く会釈すると、エクセリアは丘から飛び降りて顕現する。

エクセリア

「私はここだ」

アンドリアス

「あの小高い山の上に、俺と話したいものがあるのか。…参ったな、この姿では話す相手が燃えてしまう」

エクセリア

「馬鹿野郎。私が何故『停滞』の力を含んだこの姿に顕現したと思う？」

(※GMメモ：RP待機)

その煽りに「ああ、そうだった」と言うように、君達のいる丘へと近づく…エクセリアと同じ、『祝福無き者』のアンドリアス。

アンドリアス

「…なるほど、どおりで君が入り込むわけだ。超える力を持つ光の戦士ときたか。

君には、常にこう問いかけていたよね。『同じ月を見る者を殺めるという選択を、一体いつまで続けられるのか』と。

この無限にも思えるリセットとループの繰り返しが始まるときに同じ問いをしたとき、君は何も答えなかった。けど、今は違うようだね。君はその胸の内に答えを秘めている。

君達の行い次第では、絶望にも、希望にも転ぶ力だ。けれど、ここに君は、ロゴスとなる道を選んだ。善きものも、悪しきものも、すべてを無の中から創り出す存在だ」

(※GMメモ：RP待機)

君達に向き、アンドリアスが言う。

アンドリアス

「彼女の選択が正しかったのか…、彼女が『神』に相応しいのか…。それは、君達が見届けるといい」

彼がそう言うと同時に、天が光で満たされる。無尽の光。それは、いずれかの時間軸で起こった『第八霊災』を彷彿とさせた。

顕現を解除したエクセリアの身体に、闇が纏わり付く。

(※GMメモ：RP待機)

エクセリア

「世界を滅ぼさせない。それが、私がこの旅路の果てに導き出した『答』だ」

彼女の手元に、膨大なマナを纏った大剣が現れる。そして、空を満たす無尽光ごと、滅びの気配を闇で切り裂いた。

空を裂いた闇が、空に満ちた光と中和すると同時に、君達は、エクセリアから感じる力に違和感を覚えるようになる。エクセリアの力を変貌させたその剣の異様さも、ここで分かるだろう。

**冒険者レベル+知力ボーナス 目標値：11**

**成功時、彼女が手にした剣が『第四の剣』こと『“破神の剣”フォルトナ』であることが分かる。**

(※GMメモ：RP待機)

アンドリアス

「彼女から、話だけは聞いていたよ。

『祝福無き者が祝福を他者から奪い取っても、祝福を得ることはできないのだ』と。

それは、本当のようだね」

エクセリア

「ああ。にわかには信じられないだろうが…、な」

そう言って君達に振り返るエクセリア。

そこに、闖入者がひとつ。

**危険感知（スカウト or レンジャー観察）判定 目標値：15**

**成功時、先手を取られずに済む。**

そこには、厭に神性を帯びた異形が立っていた。

いや、立っている、というよりは、浮いている、と言うべきか。

ともかくそこには、神とも悪魔とも形容しがたい、時代から浮いた化け物がいた。

*（※GMメモ：RP待機）*

エクセリア

「新たに誕生した神に対する『出迎え』ってやつか！」

**敵：アストレイド・ピッカー**

この戦闘では、NPCとして「エクセリア」が加わります。

「エクセリア」が戦闘不能になった場合、自動的にやり直しになります。

君達は名無しの神を撃破した。

エクセリア

「なんだったんだ、あの化け物は。

まあ、これから先の未来において不都合だったから、倒すに限る」

アンドリアス

「今や祝福が失われ、色褪せた彼の地でも、アストレイドと呼ばれる神の尖兵は湧き出ている。そう考えると、君の前にアストレイドが現れたのは必然と言えるかもしれないね」

*（※GMメモ：RP待機）*

*また、BGM「お茶目な戯れ」）*

アンドリアス



「君達の学識が、一体どこまで届いているかは定かではないが…。

世界が色褪せた原因は、観測者のひとりが、世界を見放したことだとされている。その『観測者』が、一体どのような世界の何者なのか…。我々がどこまで、その『存在』を識ることができるのか…」

(※GMメモ：RP待機)

エクセリアは苦悩したような表情で、なにか考えだす。

なにか混乱したような…。君達とアンドリアスをちらちらと見ては、真剣に考え…また見て…。

#### PC への選択肢

- ・なんで悩んでるんですかエクセリアさん…。
- ・なにか不都合なことでもあるのかな？

エクセリア

「…アンドリアス、あなたも、これに関しては黙っていて欲しいんだけど…、少なくともループの始点は…私が世界を救おうとしたから、だと思う…」

数刻、周囲に静寂が訪れる。

アンドリアス

「それはわかりきっていたから、概ね察しはつくけれど…。君はもう、リセットを行うことができないのだろう？」

(※GMメモ：RP待機)

エクセリア

「…ああ。この時間軸が、やり直せる最後の世界だ」

アンドリアス

「そうか。俺はあんたの味方だ。真実を知った後も、変わらずに」

そう言って、アンドリアスは転移を実行し…その場から消えるだろう。

エクセリア

「…一旦帰ろう。私も、少し落ち着きたい」

## 報酬

### 経験点

・基本：15000 点

### 資金

・基本：4500G

### 名誉点

・基本：100 点

### 成長回数

・基本：8 回